

Internationale Heinrich- Schütz- Gesellschaft

Sektion Japan

## Newsletter

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

Nr.23

15. Dezember 2018

### 国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の歩み(13)

さて2015年12月15日発行の『国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局ニュース』第11号から開始した「日本支部の歩み」も、いよいよ最終回となります。「歩み」を書き始めるまでには、事務局を任されて満5年が経っていました。任についての初めての仕事は、2007年10月25日から28日までハンブルクで開催されたシュッツ・ターゲに出席することでした。楽しかった大会の様子を会員の皆様にお伝えすることが、今後の日本支部の活動のやり方に、何かのヒントとなるのではないかと考え、当時副会長をお務めくださった正木光江様にお計りしました。そして正木様も会報のようなものを作成したい、とのお考えをお持ちだったことを知りました。しかしお忙しい日々をお過ごし、(故)服部元会長に御相談するのも憚られ、そのままになってしまっていたとのことでした。そこで「善は急げ」とばかり一ヶ月ほど後にはもう事務局ニュースを発行してしまい、現在に至っています。また大会参加レポート以外にも、皆様にお伝えすべきことはないかと考え、まずは皆様のシュッツとの関わりや思いなどもお伝えいただければと勝手に考え、淡野弓子さんに「ハインリッヒ・シュッツ合唱団・東京」結成の経緯や活動振りに関して、執筆の御依頼をしてみました。喜ばしい即答と共に、連載ではいけないかしらとの御質問がありました。短く書くことはできるけれど、この機会に今までの軌跡をまとめておきたいお気持ちが湧き出たということでした。私に反論のあるはずはなく是非にとお願いいたしました。連載は2009年7月の第4号から始まり、今に至っています。丁寧に記録されたその記事を読みながら、自分もその後を辿って活動してきたことを思い出し、年月の重なる部分に感動および共感を憶えました。それと同時に、この支部の仕事をお任せいただきながら、なにか他人事のように間隔をもって接していた、自分の立ち位置を恥じる感情、この支部の将来を見据えるためには、もっと過去のことを知るべきではないか、との考えが沸き起こりました。そこで正木様にお尋ねしながら、日本支部の歩みを振り返る作業を始めた訳です。

何か事を為すにあたっては、どなたかの特別な情熱、継続するための辛抱強い地道な作業が必要です。(故)服部幸三元会長の協会設立に際しての情熱、その後事務局をたったひとりで見守った正木前会長の辛抱がなくては、この協会はほぼ同時期に日本支部設立を宣言した、他

の多くの協会同様に、いつの間にか姿を消してしまっただけではないでしょうか。

さてこの協会はどのようにして始まったのでしょうか。創立にあたっての宣言はあったのでしょうか。支部規約などはきちんと決まっていたのでしょうか。そのように面倒臭いことは何もなかったことでしょうか。長らく会員であられる野本 元さん、舟橋一郎さん、高井雅敏さん、梶田武志さん、原田 満さん等が、本ニューズレターに寄せてくださった御言葉からも分かるように、何かのきっかけでシュッツの音楽を知り、心惹かれた方々にとっては、当時入手困難であったレコードや楽譜が、安価な会費を支払うだけで毎年送られてくることへの魅力、時には同好の士と情報や意見交換ができる楽しみより他に、難しい組織運営のことなどお考えではなかったことでしょうか。「歩み」を辿るといっても、設立の日さえ定かではないことが、改めてはつきりとなりました。正木前会長が事務局長の任にお付きになったのは1967年に留学から戻られてからであり、それまでは(故)服部元支部長が「日本バロック音楽協会」の演奏メンバー等を中心に、音楽愛好家の方々に自らお声をおかけになり、入会をお勧めになられたことでしょうか。そのあたりの事情をお尋ねする機会を失してしまいました。そこで正木前支部長と御相談し、1965年発行の『アクタ・サギタリアーナ』第3号に見られる記事「1965年3月28日に「日本バロック音楽協会」がシュッツの《十字架上の七言》を初演し、全国に放送された(中略)その感銘の許に、日本支部が設立された」を頼りとして、1965年3月28日を日本支部設立の日とすることにさせていただきました。

何事も秩序正しい順序など考えることなく、事後承諾といった乱暴なやり方で進める事務局なので、正木前支部長には随分ひやひやした想いをさせていただきました。しかし出来上がった『事務局ニュース』を(故)服部元支部長にお送りすると、必ず達筆な自筆で感謝の言葉を認めた葉書が送られてきました。お逝去間際の筆者宛ての最後の葉書には「あなたが良いと思うやり方で、シュッツ協会のことを運営してください。ありがとう」とありました。学生時代から生意気で、無手勝流を振り回す筆者のやり方ですが、それを「良し」としてくださる先生のお気持ちの広さに、ありがたい想いが込み上げてきました。

さて設立から10年経った1975年には、会員数はまさに84名となっています。しかし1976年から1978年にかけて29名もの方が退会され、その後も増員されることなく、2000年度の名簿には30名の記載があるのみです。それからはほぼ横ばいで現在に至っています。事務局長となられた正木前支部長に降りかかってきた問題は、まさに会員の異動に対処する日々であったはずで、1975年の会員名簿の後ろに「新入会員を御紹介くださいます際には、ご氏名、ご住所には必ずふりがなを、(中略) Herr, Frau, Fräulein を明記してください」とあります。なにげなく読み飛ばしていたこの文章の重大な意味は、今頃になってはたっと気付きました。本部へは日本支部全会員の情報、すなわち敬称を付したローマ字書きの名前、住所を郵送しなければなりません。パソコンなどという便利な道具は無い時代です。手書きあるいはタイプライターで一覧表を、アルファベットで打ち込んだのでしょうか。修正液を用いたり、修正用紙を挟んだり、一筋縄ではいかない雑務の連続のはずです。また出入りの多い会員の会費納入の確認、未納者への催促等々。未納者が多い時の処理に関してお尋ねした時、「お立て替したこともある」とそっとおっしゃられたことを思い出します。その間にはレコードが曲がっていたとか、会費を支払ったのにレコード等が届かない等の、会員からの不満にも応えなけれ

ばなりません。本部からは郵送の手違いに関する質問、支部からは多くの業務の遅延等に対するお問い合わせ等々。正木前支部長とフレーリヒ前本部事務長が互いに心を通わせあっておられたのには、まさにそのような困難を乗り越えた、共有する想いがあったからではないでしょうか。

さて日本支部設立から今日に至る 53 年間に会員にお知らせしたり、お集りいただいた出来事をまとめておきましょう。

1) 多くの会員の口の端にのぼるのは、シュッツ没後 300 年を記念する 1972 年に、(故)服部元支部長がドイツ政府の御招待を受け、カッセルとマールブルクで開催されたシュッツ・フェストに参加されたことです。その帰朝報告をお聴きするために、同年 12 月 10 日に新宿の中村屋で会合が開かれました(『事務局ニュース』⑮および報告の詳細は⑲)。

2) それから何と長い年月が流れたことでしょうか。シュッツ協会の皆様とお目にかかりたい、ということは折に触れ聞く言葉でしたが、実現したのは実に 2000 年 4 月 3 日(於: 慶応大学三田キャンパス 北新館)のことでした。御自分の余命の危うさを感じ、長い間事務全般をひとりでこなしてこられた正木前支部長の処遇を気遣う(故) 服部元支部長が、御自分の考えを会員にお伝えなさる決心を、胸に秘めて開催を要請なさった会でした(『日本支部 Newsletter』Nr. 21)。

3) 2007 年 5 月 5 日(於: 東京文化会館 小会議室) 総会および「2006 年の待降節におけるシュッツ合唱団・東京の第 5 回ドイツ旅行」の御報告  
協会の小史を見渡しますと、会員の皆様にお計りすることがあり、総会を開催するということは、初めてのことです。会費の大幅値上げと事務局体制の改組が大きな議題でした。この時何もかも正木前支部長にお任せしていた雑務を分担するために、4 名体制の事務局が形成されました(『日本支部 Newsletter』Nr. 21)。

### 服部元支部長御逝去にあたって

服部幸三先生には筆者が大学、大学院時代に卒業論文、修士論文の御指導をいただきました。またその後の留学のためにも様々な御指導をくださり、更には就職に際しても推薦状等を書いてくださり、御口添えくださいました。若くして両親と死別した筆者の生活面のことも、それとなく御心配いただき、御心にかけてくださいました。また先生は直接指導された学生ばかりでなく、東京藝術大学音楽学部楽理科で学んだ全ての学生に御心配りをなさいました。先生が学生であった頃には、音楽学を学べる大学や教師もおらず、師を求めて大変な御苦勞をなさったことが根底にあったはずです。日本の多くの大学には美術史を学ぶ学科があるのに、何故音楽史を学ぶ学科が作られなかったのでしょうか。その無念に報いるために、学生をきちんと教育し、学んだことを活かして各人に働く場所を用意しようと、まさに日本の音楽学者育成のために生涯を捧げてくださいました。若い頃にはあまりにも熱心で夢中であられたためか、非常に怖い先生であったと伺ったことがあります。私が学生の頃は人情の機微も理解なさり、各人の希望に合わせて、指導の際に見事な手綱さばきをなさいました。もっと若い学生から好好爺さんのような方と聞いた時は、びっくりしました。ご自身のふたりの娘さんより若い年の学

生さんには、孫のようなお気持ちがおありだったのかもしれませんが。1952年から1991年に定年退職なさるまで、音楽学会と学生のために尽くされた人生でした。在職中も健康を壊されたことがおありとお聞きしましたが、定年後も時々体調の優れない時期をお過ごしであったかと思えます。そのようなこともあり、また外国を気軽に訪問するような時代でもなかったこともありましょう。先生がシュツツ協会と接点を持たれたのは留学時代、大会に出席されたのはシュツツ没後300年祭の時一度のみでした。

筆者は山梨大学に就職後は、少なくとも年に一度お年賀の御挨拶状を差上げ、先生からも御挨拶をいただいております。ほとんどの賀状は始末してしまいましたが、2009年のものは残っています。お宅で丹精こめて育てられ、見事に花咲いた枝垂れ桜を背景に、「桜切るバカ、梅切らぬバカ」と言われるように、桜は自力で見事に形を整えるけれど、梅は枝の剪定をしないといけないという意味だそうです。先生が嬉しそうにほほ笑んでおられるお姿が嬉しく、これは残しておきたい賀状と思ったのです。そしてそれが先生から最後に頂戴したお年賀状となりました。御自分のお苦しみなどは口になさらぬ方でしたので、訃報はかなり突然のように降りかかってきました。先生は2009年10月8日深夜に天に召されたのです。御葬儀は10月12日10:30 - 12:00に日本バプテスト浦和キリスト教会で取り行われ、私が認めた範囲では正木様、淡野様、寺本様、井形様、佐藤 望様が御出席くださいました。折しもメンデルスゾーン生誕200年にあたり、筆者は10月10日に音楽学会の支部例会で、コンラート・グラーフのピアノを拝借して、メンデルスゾーン版の楽譜によるバッハのヴァイオリン・ソナタ生演奏を通して、バッハ音楽解釈の変遷に関する問題提起をすることになっていました。その会の司会者、東京藝術大学の大角欣也先生には、服部先生の御葬儀の打ち合わせに行ってくださいました。そのような気持ちの上でも時間的にもバタバタした間に、シュツツ協会日本支部ではどのようにすべきか、会員の皆様には会長の御逝去をどのようにお伝えすべきか、分別ある判断がつかみませんでした。事務局長になって2年強で、会員の多くの方とは個人的に面識のない時でした。何はともあれ、正木様から「皆様の気持ちを纏めて、感謝とお別れの印として、お花代を御用意しては」とお教えいただきました。大きな存在であられた先生ですが、お葬式は仰々しくはなく、教え子の角倉一朗、大角欣也様の故人を偲ぶ言葉、先生自身が作曲した教会幼稚園の園歌「花のつぼみは」、さらに東京藝術大学バッハカンタータクラブによるカンタータ107番の演奏で締めくくられました。先生の略歴も生没年月日と東京藝術大学奉職の年月日、五反田基督教会でバプテスマを受けた年と浦和キリスト教会に転入した年だけしか記されていませんでした。多くの名誉もお受けになり、受勲もされているのですが、何も記されていませんでした。御家族の方は先生の御気持ちを受け留めて、そうされたのであろうと感じました。先生は教え子達がそれぞれの立場で、気持ちのよい仕事をし、それが音楽学を深めることに繋がれば満足されるのではないかと思います。会員の中には、あのように立派な方の御逝去は新聞等でもっと大きく取り上げられてしかるべきではないか、シュツツ協会はそのためにもっと努力すべきではないか等の御意見の方もおられました。しかしそのことを先生がお喜びになるか等、考え巡らせそのままにいたしました。

なお会員の皆様へは2009年12月に発布した『事務局ニュース』⑤の冒頭で、正木副委員長がお知らせくださいました。

4) 支部長不在となった支部では、すぐに次の支部長を選ばねばなりません。

年末が迫っていましたが、急遽2009年12月16日(水)(於:東京文化会館 小会議室)に総会および懇親会を開催しました。大切な御相談は日本支部の支部長を選ぶことでした。今まで実質的には支部長代理を務めてくださった正木副支部長がおられます。高齢のお母様のお世話をしっかりとなさりたいお気持ちの正木様でしたが、シュッツ協会日本支部にとって、かけがえのない方です。御無理を承知で支部長をお願いいたしました。事務局は急いで本部に服部支部長の御逝去、新支部長として正木光江様の御就任をお知らせしました。本部では『アクタ』の編集が佳境に入った所でした。服部氏のお写真、御業績、お人柄等を纏めて、数日の内に知らせるようにとの催促でした。そこで筆者は新支部長に御相談する間もなく、要求された事柄を送りました。

5) さてそろそろ日本支部50周年が近着いてきました。皆様に様々なことをお計りするべきですのに、時間のみが羽が生えたように飛んでいきました。かなり唐突な考えですが、特別な用事のない懇親会を催してはと思いました。2014年1月13日(月・祝)12:00-15:00(於:ドイツ料理 カイテル)で、昼食を御一緒する企画をいたしました。7名の方が御出席くださり、楽しい時間を過ごしました。(『事務局ニュース』⑭)

6) 国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部50周年を祝して

2015年3月30日(月)12:00-15:00(於:精養軒1553店)11名の御出席を得て、短いながらも楽しい時間を過ごしました(『事務局ニュース』⑯)

7) 2018年4月5日(金)18:30-20:30(於:精養軒1553店)総会・懇親会

正木支部長の辞任願いに応え、その処理を会員に御相談する総会の開催です。皆様に自由にお考えいただくというより、正木様の御要請を受け、荒川が支部長をお引き受けすると共に、事務局には局長を置かず、庶務、会計、広報と仕事を分担することをお認めいただき、庶務を木村佐千子さんをお願いいたしました(『国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部 Newsletter』Nr.22)。

新体制になりましたが、10年来懸案になりながら、手付かずの課題がありました。それは広報のためもあり、日本支部のホームページを作成することです。そこに掲載すべき内容として、「規約」を整備する必要があります。さっそく庶務の木村佐千子委員を交えて、一応恰好のつく文書を作成しました。もっと大切なこととしては、シュッツ紹介記事の掲載がありません。これは日本で唯一の、真の意味でのシュッツ研究者といえる、正木前支部長にお願いすべきことです。「では6月末までに」という御約束を違えず、シュッツの生涯と業績、重要な音楽作品リスト表が送られてきました。それを見事なレイアウトで仕上げてくださいしたのは、広報担当の佐藤 望委員です。2018年から国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部は、ホームページをもつことになりました。今まで紙媒体で会員のみにあてられたニューズレターも、そこで購読することができます。アドレスは<http://www.schuetz-jp.org/>です。多くの方の御訪問をお待ちしています。古くからの会員の方々の証言にありますよう、今後はふとしたきっかけでシュッツの音楽に関心を持たれた方々に、シュッツや彼を取り巻く周辺の音楽文化について、お伝えできるように取り組んでいきたいと思っております。(完) (荒川恒子記)

## 第49回国際ハインリッヒ・シュッツ・フェスト

チューリヒ 2018年11月1日—4日

支部長 荒川恒子

昨年のマールブルク大会において、2018年大会はチューリヒで11月に開催の報を始めて聞きました。久しぶりにチューリヒを訪れる、しかもかの有名はアインズィーデルン修道院への小旅行は魅力的です。しかし何故急にチューリヒ？ また日程はカッセル音楽月間と重なり、その責任者である事務局長は同行できないことが、最初からわかっていました。しかし水面下で準備が始まっていたのでしょうか。チューリヒ大学音楽学研究所教授のブルグギッサー・ランカーTherese Bruggisser-Lanker 女史が説明のために、総会に御出席でした。女史は中世からバロック時代の音楽、特にザンクト・ガレンやアインズィーデルンに所蔵されている楽譜の研究、宗教と音楽の関わり等を研究主題とされています。まだ若い美しい方ですが、実務にも長けたまさに運営の適任者でした。彼女の能力の高さに信頼をおいて、本部事務局長は前もってきちんと準備をしておく、開催地における実務は皆で助け合ってやる、ということでチューリヒ大会決行となりました。大会は毎年の行事ですから、相応しい場所と大会の中心課題の選択、現地の責任者との内容に関する打ち合わせ等が、いかに大変かが想像される一幕でした。大会が始まる前に本部事務局長シュルックウェルダーさんからは宿舎やチケットの予約に問題はないかとの御心遣い、チューリヒのブルグギッサー・ランカーさんからは、歓迎の御言葉が届けました。なお4日間におよぶ会議やシンポジウム、コンサートではブルグギッサー教授が、小遠足やその他のプログラムは夫君と思われるブルグギッサー氏が献身的なサービスをしてくださいました。

今回のフェストはスイスにおける宗教改革者ツヴィングリが、「民衆の説教者」として1518年末にベネディクト派修道院アインズィーデルンからチューリヒに招聘され、1519年1月1日からグロスミュンスターで説教を始めたことを意識したものでした。昨年訪れたマールブルク大学の壁に、1529年に当地の城において行われた宗教会議において、ルター、メランヒトンに混じってツヴィングリの姿が描かれています。しかしこの時にルターとツヴィングリは「聖餐式」におけるパンと葡萄酒の意味に関して、意見を異にしました。そこで宗教改革を行わねば、ということでは同意見であっても、ルターとツヴィングリは袂を分かつことになったのです。なお余談になりますが、いつもイギリスからの唯一の大会参加者である老紳士とお話をしました。彼はツヴィングリという名前は一度も聞いたことがないとのこと。日本では学校の世界史の教科書に、宗教改革の項があり、ルター、ツヴィングリ、カルヴァン等の名前を憶えたものであることとお話し、互いにビックリしました。

さてチューリヒといえば、一般には金融機関・投資ファンド等で有名です。さらに世界的に治安、教育水準、インフラ等のバランスが良くとれ、安定した街ということで高い評価を受けています。チューリヒ工科大学、チューリヒ大学と高い水準を示す大学の存在、斬新なレパトリーや演出で名高いオペラ劇場、演劇のための劇場、博物館や美術館も見逃せません。しかしたった数日間の滞在、しかも室内で講演やコンサートを聴く目的で訪問した者の感想は、物

価が非常に高い都市、リマト河の両岸に展開される旧市街には観光客と、彼らを目当てにした似たり寄ったりのホテル、レストラン、お土産屋ばかり。すぐに丘陵が迫っているため、一般庶民の生活振りを観察することが、あまりできません。3日の午後に行われたチューリヒ散歩でも、街の旧市街の説明に終始しました。ツヴィングリが「聖書のみ」をモットーとして、従来の慣習を打ち破るために、受難週の断食期間に掟を破って、仲間達とソーセージを切り分けて食した場所、トイレとして使用されていた、出入りも難しい街中の細い通路、はてはカール大帝が宿舎として用いたのではないかとプレートに書かれた小さな家等、様々な時代にチューリヒが果たした役割を髣髴とさせる建物を見物しましたが、今ひとつ街としての全体感が掴みにくいもどかしさがありました。そうでした。この地はツヴィングリの急進的な改革により、この世の贅を尽くしたものを、ことごとく破棄しようと、叩き潰してしまった過去を背負っているのです。ヨーロッパの他国の方にお尋ねすると、スイスを訪問するのは冬休暇にスキーをするため。特産物といえば農産物とその加工品、すなわちチーズとチョコレートとなるのです。集中する国際政治機関、金融機関、多くの外国人の学びの場所である大学や芸術大学の存在、豪華なブランド製品の並ぶ繁華街と一般庶民の生活振りの間に、何かギャップがあるように感じられます。

さて大会の中心課題は「様々な宗教改革と関わるコンサート」とあり、私には最初何の意味か定かにわかりませんでした。しかし行事に参加する中で、スイスや他のキリスト教圏の門題が少しみえた感じがします。ツヴィングリと宗教改革、今日また将来のスイスの文化のあり方を模索し、他のヨーロッパの国々との協賛を求める意識が垣間見られたのです。フェストの会場はグロスミュンスターの裏通りにある文化会館 Kulturhaus, Helferei (ツヴィングリの住居を改築したもの。一室は当時のままを保存し、小会議室として使用)、およびグロスミュンスターの礼拝堂の裏にある、チューリヒ大学神学ゼミナールの教室でした。そこからは教会の中庭が見え、多くの学生が出入りしていました。今なお神学部で学ぶ人が多いのは、ちょっとした驚きでした。

日本からの今年の参加者は佐藤 望さん、米沢陽子さん御夫妻、そして荒川の4名でした。11月1日文化会館で開会式の挨拶、開会に臨んでの講演はスイスのフライブルク(フリブール)大学ラインハルト教授により、「17世紀のイタリア」という題目で、スイスよりずっと優れていた、当時のイタリア文化の紹介。その後 *Apero Riche* と称されるビュフェ・スタイルでの軽食でのもてなし、そして夜は会館ホールで、声楽家4人(Ensemble Stimmwerck)とリュート奏者によるコンサート『かくて我らはひとつ *Ut unum sint*』で、改革期の作品と現代曲が、様々な宗派の教会の一体化を願って交互に演奏されました。ルターと交流のあったスイスを代表する作曲家ゼンフル(ca. 1489-1543)、その師でカトリックのミサ固有文通年分を、多声で作曲する試み半ばで斃れたイザーク(ca. 1450-1517)、アッパーエースタライヒ出身のルター派神学者で音楽家レオンハルト・パミンガー(1495-1567)等々。現代の作曲家としては、エストニア出身でルター派からギリシャ正教に改宗したペルヴォ(1935 - )、イギリス人ながらポルトガルに居住し、ギリシャ正教の音楽を愛するムーディ Ivan Moody(1964 - )、締めくくりにはルターとシュッツといった内容です。まさに今回の主題が凝縮されたコンサートでした。

11月2日と3日の午前中は、各々2本の講演を聴講しました。盛沢山の内容で、アンダンテでお願いしと言っても、その熱心は停めることはできず、プレストのテンポでしゃべり続けられるのには、異国の人間にとっては勿論、母国語の方々も小声で「これでは何のことやら」などと囁かれるのは毎度のこと。しかしそれを通して、シュッツの音楽を音楽様式や形式の面から研究するのではなく、人間の心の交流を象徴的に表現している面からの紹介(例 SWV 465)、ドレスデンの先輩イタリア人楽長スカンデッロ、イタリアでの師 G. ガブリエーリ、C. モンテヴェルディの様式が同時にみられ、ドイツの伝統、先駆的なイタリア様式の混在を指摘する作品例(SWV 50)、さらには一般的にはあまり指摘されないことですが、シュッツの活動地にも届き、シュッツ自身が触れることもあったはずの、フランス音楽への言及等がありました。

2日目の午後は楽しみだったアインズイーデルンへのバス旅行です。ブルギッサー氏が、ガイドよろしく説明してくださるのに合わせて、右左と顔を振りつつチューリヒ湖、牛の食むなだらかな丘陵地帯、新しく建設されたサンルーム付きマンションなどをみながら、あっという間に到着です。バスは定刻に走り、出迎えてくださる案内の僧侶や、当修道院の楽譜研究家の方々もスタンバイしています。この度の滞在では、絶えず時間厳守で集合という命令がブルギッサー御夫妻の口から出、皆さんもそれに従っておられました。日本も時間厳守では人後に落ちないはずでしたが、どうも負けた感があります。

まずはアインズイーデルン修道院の設立事情から、1516-1518年にツヴィングリが滞在したことに関する序論の後、全員は2つのグループに分かれて、特に貴重な所蔵書籍や楽譜を見学させていただきました。アインズイーデルンのグレゴリオ聖歌の手稿譜そして「アルプスを越えての音楽の伝播—17、18世紀の北イタリアの教会音楽」と題し、当修道院に遠方からの楽譜が集められた理由と手段に関して、実に素晴らしい論が展開されました。その後かの有名はバロック図書館の見学でした。見事な装飾というより、本棚等の曲線を上手に活かした建築そのもの、そこにはいっている書籍の美しさに感心するばかりでした。その後聖堂でヴェスパーに預かり、オルガン・コンサートを聴きました。同教会では2台の大オルガンが前方両側に分かれ、祭壇の真中に小さなオルガンが置かれています。なおこの小オルガンのみが昔からの楽器だそうです。さてこの日はアインズイーデルンおよびローマでも、その即興の素晴らしい腕を振うというオルガニストがサーヴィスしてくださいました。それもこの機会のためにブルギッサー教授がお願いした主題に基づく即興でした。主題はダヴィデ王の3番目の息子アブサロンが父に反旗を翻し、両者群が戦いますが、王の部下が息子に刃を突き付けて命を奪ったことを知り、嘆く父の気持ちを歌った《わが息子、アブサロン》(SWV 269)の冒頭部分でした。オルガニストは3台のオルガンの特質、特に音質をうまく活かし、同じ主題をバロックから現代に至る音楽様式に乗せて、見事に奏しました。それによりこの物語、さらには父の心情が浮き彫りにされた瞬間でした。充実した午後を過ごした一行には、さらにチューリヒの街近くの丘陵に建つレストランで、フォンデュの夕食を取る、というアトラクションがっていました。飲み放題の白ワインとチーズの鍋に満腹となり、しばらくチーズは結構となりました。

11月3日の午前中は講演、午後は前述のようにチューリヒ街の見学、総会、夜はコンサートとこれもぎっしり詰まったスケジュールでした。総会では幾つかの新しいことが決定されたので、後述いたします。夜のコンサートはリマト河の反対側に位置するアウグスティナー

教会で開催されました。お蔭で行く道でちらっと近代的な繁華街もみることができました。《我ら喜びあおう gaudeamus》と称され、シュッツの作品支援協会により開催されたこのコンサートはシュッツの《シンフォニエ・サクレ》、G. ガブリエーリ、モンテヴェルディの詩篇歌で、主にあつての我らの喜びを歌う名曲を集めたものでした。ルツェルンから合唱団、合奏団を招き、ソロ歌手も見事に歌い、気持ちのよい一夜でした。

11月4日の礼拝に続いて、グロスミュンスター・カントレイにシュッツ協会の希望者(米沢夫妻も)が加わっての「宗教改革日曜日の朝の音楽」が催されました。沢山のシュッツ作品を練習しておられたようです。スイスではほとんど聴いたことも歌ったこともないシュッツの全曲を、今年から5年かけてスイス中で演奏する試みがなされるそうです。日本ではひとつの合唱団が、全曲演奏を成し遂げていることをお伝えし、ビックリされました。

スイスは今までカトリック、改革派が約半半のキリスト教国でした。しかし若者の宗教離れは進んでいます。言語もドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語が共存し、連邦共和国として国全体が緩く結びつき、各カントンの自治も重んじる国です。しかしこのままほっておいて良いか考える時期にさしかかっているようです。準備期間がほとんどない中で、ブルギッサー夫妻の献身的な仕事振りで実現した会ですが、エキューメニカルな方向の模索が随所に感じられました。協会としては今後スイス支部を設立し、協力し合うことを約束できた嬉しい大会でした。

## チューリッヒ大会に参加して

会員 米沢陽子

2018年11月1～4日、チューリッヒで行われた大会に参加いたしました。今回参加を決めた大きな動機は、2日目のエクスカーションにアインズィーデルン修道院見学が組み込まれていたことでした。グレゴリオ聖歌が必修というカトリック系ミッションで学生時代を過ごした私にとって、アインズィーデルンは憧れの地でありました。グレゴリオ聖歌理論の授業で使用されていたテキストは [E. カルディーヌ](#)『グレゴリオ聖歌セミオロジー』(水嶋 良雄 訳)という、古ネウマの研究書でした。グレゴリオ聖歌歌唱法で歌う曲は Gladuale Triplex から選ばれたもので、四線譜の四角ネウマの上下に記されている古ネウマ。ミミズのような線と点。授業ではよく先生から「ランの写本だとなっているけれど、アインズィーデルンの写本ではこういう形で記されています」という解説がなされました。古ネウマの形に従って歌うと、四角ネウマだけではわからない抑揚、自然な流れが実感できるのです。「実際にこの目で古ネウマの写本を見てみたい。どのような写本なのだろう…？」その望みは今回叶えられたわけです。

アインズィーデルンではその他にも興味深い貴重な図書や楽譜を閲覧することができ、また修道院の図書室も見学いたしました。床から天井までびっしり古い書物が並ぶさまは圧巻でした。(見学用に作られたディスプレイであったとしてもです) 夕方からは聖堂で晩の祈りにあずかりました。内陣に入室してきた修道士の数は30人弱でしたでしょうか。かつては70人も

の修道士が生活していた大修道院だったそうです。何百年にも渡って歌い継がれてきたグレゴリオ聖歌をこの聖堂で聴けたことは幸せでした。祈りの最後に聖堂後方のマリア像のある祠に移動して歌われたポリフォニーのサルヴェ・レジナ（作曲者はわかりませんが…）の美しさは忘れられません。

シュッツ・フェスト3日目にはチューリッヒ市内のオルガン見学ツアーに参加、Grossmünsterでは2階バルコニーに上がり、間近でオルガンを見ることができました。水平トランペットを持ち、またペダルに Subbass 32 フィートのパイプを持つ4段鍵盤の巨大な楽器です。ここではヒメネスのバッテリーア（水平トランペットを駆使して演奏）とバッハのパッサカリアを聴きました。

シュッツ・フェストに出席するときには必ず参加する合唱プロジェクトについても記しておきます。今回、合唱プロジェクトに申し込んだもののいっこうに連絡が来ず、出発の2週間前によく楽譜がメールの添付ファイルで送られてきました。すべてシュッツの作品でしたが、その数なんと11曲。最終日の宗教改革礼拝で現地の聖歌隊と一緒に歌うわけなのですが「これを2週間で譜読みするのか???」。チューリッヒに着いて日程を見ると、練習はたったの2回。いつも合唱プロジェクトで一緒にいるカッセルのご夫婦も「こんなにたくさんの曲、ありえないわよねえ」と困惑顔です。練習に出てみると、私たちはゲストで、歌う曲は半分程度で、あとの曲はソリストと聖歌隊が歌うことがわかりましたが、開催地の教会には個々にさまざまな事情がありますから、合唱プロジェクトもそれに沿っていくわけです。少し中途半端な気もしましたが、それでも大好きな Die Himmel を響きの素晴らしい Grossmünster で歌い、声が会堂の奥にまで行き、すっと消えていく体験は得難いものでした。シュッツ・フェストの合唱プロジェクトでシュッツを歌えることは、シュッツの曲に魅せられた者にとってはとても幸せなことなのです。

今回のチューリッヒ大会でもたくさんの方々のご尽力がありました。大会でのさまざまな出会い、学びを思い出しつつ、ご報告を書かせていただきました。感謝のうちに。

## ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京50年の軌跡 (20)

会員 淡野弓子

今年(2018年)はハインリヒ・シュッツ合唱団・東京の創立50周年ということで、4回の記念演奏会を開催し、去る11月9日(金)にその最終回シリーズIVを無事終了することが出来ました。これを機会に拙稿のタイトルをこれまでの「40年の軌跡」を「50年の軌跡」と改めさせて戴くことをお許しください。自分の寿命がどこまで追いつけるのか不安ではありますが、こればかりは心配しても始まりません。頑張れるところまで努力致します。

さて2002年4月下旬、私たちは8日間のドイツ演奏旅行へ出掛けました。主たる目的はハイブルゴンのハインリヒ・シュッツ合唱団とのジョイント・コンサートです。

4月23日 13:00 成田発 フランクフルト経由 21:30 ミュンヘン着  
 4月24日 午後練習 ゲネプロ 20:00 ミュンヘン・聖マテウス教会コンサート  
 4月25日 午前ミュンヘン市内観光 正午ウルムへ移動 夕刻練習  
 4月26日 10:30 ハイルブロンへ出発 14:00 ハイルブロン市長レセプション  
 練習 ゲネプロ 20:00 ハイルブロン・シュッツ合唱団との合同コンサート  
 バート・ヴィンプフェン市立教会  
 4月27日 エスリンゲンへ移動 午後練習 19:30 エスリンゲン聖ディオニス教会音楽礼拝  
 4月28日 9:00 ハイルブロンへ移動 午後練習 ゲネプロ 17:00 ハイルブロン・シュッツ  
 合唱団との合同コンサート ハイルブロン・クリストゥス教会  
 20:00～夕食 / 交流会  
 4月29日 バスでフランクフルトへ 20:50 フランクフルト発  
 4月30日 14:55 成田着

シュッツ合唱団の陣容は東京から女声 21 名、男声 4 名で、そこへミネアポリスから淡野桃子、ケルンからアグネス・ギーベル先生とともに淡野太郎がやってきました。

まずは4月24日、ミュンヘンの聖マテウス教会で歌いました。ミュンヘンには私がワシントンDCで知り合った発声の研究者ギゼラ・ケップ(Gisela Köpp)さんがお住まいで、この方の提案でバイエルン独日協会が聖マテウス教会でのコンサートを主催してくださる事になったのです。驚いたことに、ケップさんが教会で出会った1人の女性に「東京のシュッツ合唱団を知っていますか？」と尋ねたところ、その女性は「私は東京に居た時、シュッツ合唱団で歌っていたのですよ。」と。彼女の名はアンケ・シュトロップ(Anke Stropp)さん、ゲーテ・インスティテュート・東京で働いておられ、シュッツ合唱団のアルトのメンバーでした。当時の団員であった大森雄治、淡野武司などはドイツ語を習いに毎週シュトロップさんのお宅にお邪魔していたのです。聖マテウス教会はミュンヘンのプロテスタントの中心となる教会で、当時のオルガニストは、この教会を本拠地とするミュンヘン・モテッテン・コアの指揮者でもあるハイコ・ジーメンス(Heyko Siemens)です。シュトロップさんは東京に来られる前からこのコアのメンバーで、帰国後もここで歌っておられるとのことでした。

Mittwoch, 24. April 2002 20 Uhr

St. Matthäus-Kirche am Sendlinger-Tor-Platz, München

Heinrich-Schütz-Chor Tokio Leitung: Yumiko Tanno

Solisten: Agnes Giebel, Sopran Momoko Tanno, Sopran Taro Tanno, Tenor

Masaru Ishii, Orgelpositiv

[Veranstalter: Deutsche-Japanische-Gesellschaft in Baiern e.V.]

## PROGRAMM

Heinrich Schütz(1585-1672)

Kyrie, Gott Vater in Ewigkeit, SWV420

Das deutsche Gloria in excelsis, SWV421

Arvo Pärt(1935- )

Magnificat für gemischten Chor (1989)

…which was the son of…; St.Luke 3,23-38 für Chor a capella (2000)

Heinrich Schütz

Der Nicaenische Glaube, SWV422

Die Worte der Einsetzung des Heiligen Abendmahls, SWV423

Genzo Takehisa(1957- )

Gott lebt noch, für gemischten Chor a capella

Klagelied über den Tod seines Sohnes Daigo Takehisa am 17. Juni 1997

～PAUSE～

Heinrich Schütz

Schaffe in mir, Gott, ein reines Herz, SWV291

Geistliches Konzert für Sopran, Tenor und B. c.

O süßser, o freundlicher Herr Jesu Christ, SWV285

Geistliches Konzert für Sopran-Solo und B. c.

Hugo Distler (1908-1942)

Singet dem Herrn ein neues Lied, Motette über Psalm 98, 1. 4-9a,

Nr. 1 aus Op.12: Geistliche Chormusik

Heinrich Schütz

Der 111. Psalm: Ich danke dem Herrn von ganzem Herzen, SWV424

Dank sagen wir alle Gott, SWV425

プログラムは、シュッツのドイツ語ミサ全6曲の間に現代の宗教作品を挟み、休憩後にシュッツの重唱と独唱を置いたものでした。演奏会には 80 年代に東京でバスのメンバーであった故・バイヤー(Dr. Bayer)さんの夫人と息子さんが聴きに来てくださり、さらに我が恩師、故・エーマン教授(Prof. Ehmann)の甥御さんという方もお見えになり、さまざまな邂逅に今思い出しても胸が熱くなります。またこの日はコンサートと共に蘆野ゆり子のカリグラフィー展も催されました。

さて翌 25 日、目指すはハイルブロンでしたが、途中でアインシュタイン生誕の地ウルムに泊りました。ウルムはドナウ川沿いの街でこの川を辿って行くとウイーン、ブダペスト、ベオグラードなどを経て黒海へ。ああ、これがかのドナウ川か、と感慨ひとしおでした。また大聖

堂はケルンのそれより 50 センチ高く世界一とのこと、ウルムではお食事もホテルも格別で、中一日の休日をゆったり(午後、学校を拝借して練習をしましたが)過ごすことが出来ました。この旅行をアレンジしてくださったヨーロッパ・ツアーの今は亡き菊田佳之さんの優しさをしみじみと思い出しております。

26 日、いよいよ本命のハイルブロンへ。50 年以上前からその名に憧れを抱いていたハイルブルンのハインリヒ・シュッツ合唱団とのジョイントが待っているのです。この合唱団は 1947 年、フリッツ・ヴェルナー(Fritz Werner 1898-1977)が創設、1973 年まで指揮を務め引退、その後 1977 年交通事故により逝去し、現在の指揮者ミヒャエル・ベッチャー(Michael Böttcher)氏は 5 代目ということでした。

ウルムからおよそ 2 時間でハイルブロン市に到着すると、市庁舎の会議場でハイルブロン市長による歓迎パーティが待っていました。我々一同、このような場面は予想していませんでしたので、ただただビックリ！そして市長さんの隣には民族衣装のそれは可愛いお嬢さんが！説明によると、この市には「ハイルブルンのケートヒェン」という 19 世紀初頭に書かれたラヴストーリーがあり、それに因んで数年に 1 度コンテストを催し、新しいケートヒェンを選ぶのだそうです。このお嬢さんはずいぶん前に選ばれたケートヒェンで、この歓迎行事が彼女の初仕事とのこと、皆その美しさに見惚れ、特に男性メンバーたちは、ポストカードになっている先代のケートヒェンより格別に奇麗だと大騒ぎでした。このケートヒェンはブルーの服を着たお人形にもなっていて市のお土産の一つですが、私は今でもガラス扉の本箱に飾って大切にしています。

それから隣町のバート・ヴィムプフェンへ。市立教会でのゲネプロで、両合唱団で二重合唱をしようと思っていたシュッツの曲がハイルブルンのレパートリーに無いことが判明、やむなく東京側のみで二重合唱ということになりました。少人数で 8 声部という危ない橋での幕開けでしたが、この頃は本郷教会での SDG を毎週続けていましたので、危機的状況には強く、なんとか乗り切る事が出来ました。

## Geistliche und weltliche Chormusik

Freitag, 26. April 2002	20:00 Uhr	Stadtkirche Bad Wimpfen
Sonntag, 28. April 2002	17:00 Uhr	Christuskirche Heilbronn
Heinrich-Schütz-Chor	Tokio	Leitung: Yumiko Tanno
Heinrich-Schütz-Chor	Heilbronn	Leitung: Michael Böttcher

Programmablauf

Eröffnung:

Heinrich Schütz (1585-1672)

Jauchzet dem Herren SWV36

### **Heinrich-Schütz-Chor Tokyo/ Japan**

Heinrich Schütz(1585-1672) Die mit Tränen säen SWV378

Der 111.Psalm: Ich danke dem Herrn von ganzem Herzen, SWV424

### **Heinrich-Schütz-Chor Heilbronn**

J. S. Bach (1685-1750) Aus der Motette „Jesu, meine Freude “

I. Choral: „Jesu, meine Freude “ VI. Fuge: „Ihr aber seid nicht fleischlich “

XII. Choral: „Weicht ihr Trauergeister “

### **Heinrich-Schütz-Chor Tokio**

Genzo Takehisa(1957- )

Gott lebt noch, für gemischten Chor a capella

Klagelied über den Tod seines Sohnes Daigo Takehisa am 17. Juni 1997

### **Agnes Giebel, Sopran, Köln**

Heinrich Schütz

Schaffe in mir, Gott, ein reines Herz (Sopran und Tenor) SWV291

O süßser, o freundlicher Herr Jesu Christ (Sopran-Solo) SWV285

### **Heinrich-Schütz-Chor Tokio**

Heinrich Schütz

Der Nicaenische Glaube SWV422

### **Heinrich-Schütz-Chor Heilbronn**

F. Werner (1898-1977) aus Zwölfe Chorlieder op. 46

Nr. 4 „Wiegenlied im Kriege “ Nr. 6 „Zum Abschied “

### **Heinrich-Schütz-Chor Tokio**

Arvo Pärt(1935- )

Magnificat für gemischten Chor (1989)

### **Orgelpositiv-Solo**

Johann Jacob Froberger (1616-1667)

Caproccio Nr. 2 FbWV 508

### **Heinrich-Schütz-Chor Tokio**

Rudolf Mauersberger (1889-1971) aus der „Geistlichen Sommermusik “ (1948)

Geh aus mein Herz und suche Freud

Englische Nachtigall (Blockflöte-Solo) Jacob v. Eyck (1589/90-1657)

Schönster Herr Jesu/ Darum sage ich euch

Ich bin das Brot des Lebens/ Wann wird doch einst erscheinen

### **Zum Abschluss beide Chöre**

Heinrich Schütz

Also hat Gott die Welt geliebt SWV380

## Solisten:

Agnes Giebel (Köln), Sopran/ Momoko Tanno (Minneapolis), Sopran  
Taro Tanno (Tokio), Tenor/ Blockflöte/ Masaru Ishii (Tokyo), Orgelpositiv

## Heinrich-Schütz-Chor Tokio

Sopran I: Imamura, Yukari 今村ゆかり/ Nishikawa, Mariko 西川真理子/  
Obuchi, Kumiko 大渕久美子/ Omori, Junko 大森純子/ Saito, Wakako 齊藤嫩子/  
Seo, Fumiko 瀬尾文子/ Tamai, Chie 玉井千恵  
Sopran II: Minato, Mineko 湊岑子/ Mori, Shinobu(故)毛利忍/ Saito, Tomoko 齋藤知子/  
/Sakamoto, Yasuko 阪本恭子/ Shibata, Keiko 柴田圭子/ Tanno, Momoko 淡野桃子/  
Yamada, Yukiko 山田由紀子  
Alt: Akiyama, Yuriko 秋山百合子/ Ishizuka, Rumiko 石塚瑠美子/  
Kageyama, Teruko 影山照子/ Matsui, Minako 松井美奈子/ Miyoshi, Aiko 三好愛子/  
Nakae, Sachiko 中江紗智子/ Nakamura, Yasuko 中村康子/ Sato, Michiko 佐藤道子  
Tenor: Saito, Koji(故)齋藤公治/ Tanno, Taro 淡野太郎  
Bass: Ishii, Masaru 石井賢/ Taniguchi, Tadashi 谷口正/ Sakamoto, Ichiro 阪本一郎  
[Veranstalter: Ensinger (Mineral Heilbronn) & Konzertdirektion Kikuta, Tokyo]

というわけで、ハイルブロン・シュッツは最後に合同で歌った《Also hat Gott die Welt geliebt》のみでした。シュッツでは聴き手が集まらないので段々に減って行き、一時は合唱団名変更の議論まで為されたそうです。とはいえ感動的だったのは、滅多に聴く事の出来ないフリッツ・ヴェルナーの作品が歌われたことです。彼らが創立者を敬愛し、日本人に紹介しようとの気持ちが我々の心にしみりと伝わって来ました。

ギーベル先生はヴェルナーの指揮でバッハのカンタータ 31、32、57、105、147、149 番をこの合唱団とともに録音され、当時のメンバーとの再会を楽しみにされておいでしたが、終演後、沢山の老男性歌手たちがギーベル先生のもとに駆け寄ってきたのには驚きました。「女王」の面目まさに躍如たる瞬間を眼のあたりにし、人と人との繋がり、出会い、再会は常に我々にとっては正真正銘のドラマであると痛感した次第です。

## 4月29日付『ハイルブロン・声』紙に掲載されたマルチン・ベトリウス氏による批評:

心を動かされた。驚いた。バート・ヴィムプフェンの市立教会における東京とハイルブロン両合唱団の演奏会。アグネス・ギーベルが登場しシュッツの小教会コンチェルト2曲を歌った。

アグネス・ギーベルは戦後のドイツオラトリオ歌手として、中でもバッハ作品によって世界的名声を博したが、1990年以來、ソリストとして、また教育者として日本との交流を深めている。彼女は喉の炎症にも拘わらず、生来の緊張感溢れる迫力で、くつきりとしたコロラチャーを聴かせた。80歳という年齢で歌う「ああ、わたしは直ぐに御許に参ります。そしてあなたの栄光にまみえることができるなら…。」には心を打たれた。その「直ぐに」がそう直ぐには来ないことを祈ろう。

淡野弓子、1968年、東京にシュッツ合唱団を設立した人。彼女は東京での学業を終えるとき

らにドイツに学んだ。この当時はまだ、彼女が優先するアクセントを強調し、歴史的演奏表現である文節を細かく分ける歌い方などを知るに及んでいなかった。だが、アメリカ滞在ののち彼女は日本で古楽と現代音楽の研究に携わる。この日、シュッツ作品（主に歓呼せよ/ 涙とともに種蒔く者は/ 詩編 111/ ニカイヤ信条）のほか、マウエルスベルガーの《夏の歌》(1948) より一曲が今述べたような技法によって演奏された。アルヴォ・ペルトの礼拝音楽《マニフィカト》はよりレガートな響きであった。

注目すべきこと：卓越した発音と女声が多かったにも関わらず良く混じり合った響き。抒情的でありつつも、確信に満ちた長調の和音が鳴り響いた武久源造の《亡き子に寄せる悲歌》。

淡野弓子の解釈に比し、ミヒヤエル・ベッチャーの指揮するハイルブロンシュッツ合唱団はバッハの《イエス、わが喜び》からいくつかのモテットを、カンタービレに、大ぶりの情感溢れるデュナーミクで歌った。またフリッツ・ヴェルナーのロマン派様式による作品 16 より 2 曲を演奏。

大オルガンに座った石井賢は上品かつ厳粛にフローベルガーの《カプリッチョ 2 番》を奏いた。淡野太郎はリコーダーソロの名人芸でその先を豊かに展開、この曲はハイルブロンクリストゥス教会でも演奏されるとのことだが、ファン・アイクの《天使のナイチンゲール》。両合唱団は合同でベッチャー指揮のもと、シュッツのモテット《それほどに神はこの世を愛し》を歌った。ここでは日本人歌手たちも、指揮者のドラマティックな、緊張をはらむ旋律線の動きに順応した。Martin Petrius Heilbronner Stimme (4/29/2002 ‘ハイルブロンの声’ 紙)

4月27日(土)、聖ディオニス教会で毎週土曜日に行なわれている Stunde der Kirchenmusik での演奏のため、ハイルブロンからバスで1時間半ほどの街、エスリンゲンへ。ドイツではこのような音楽礼拝を行なっている教会が幾つもあり、私たちが東京上荻の本郷教会で行なっている Soli Deo Gloria ~ 讃美と祈りの夕べ ~ はドイツのこのスタイルがモデルです。歴史を遡れば、リューベックの聖マリア教会でトウンダーが始めた〈Abend Musik 夕べの音楽〉を後任のブクステフーデは積極的に取り組み、さらに大きく発展させました。バッハがここでの演奏を聴くため、勝手に休暇を大幅に延長したため、ライブツィヒ当局から厳しい叱責を受けたという逸話は余りにも有名です。

さてこの〈教会音楽のひとつ〉はどのように始めればよいのかがずっと気になっていたのですが、7時5分前になると「さあ、これから出て行って歌う位置につき、鐘が鳴り終わったら歌い出してください。」との案内がありました。少し前から鐘は街中に鳴り響いていましたが、いつか鳴り終わるのかを知るのは初めての者には難しい課題です。鐘の音はだんだんに間隔を広げゆっくりになって行くとはいえ、歌い出してから鐘が鳴ったらどうしよう、と気が気ではありませんでした。幸い失敗はしなかったのですが、この緊張の体験を忘れる事は出来ません。演奏が終ると牧師が「普段はここで終わりですが、ひと言申し上げたい。今夕の演奏によってあなたがたは通常では結び得ないものを結び合わせてくれました」との言葉をいただき、音楽に秘められた力を再認識し感謝でした。集まってくださった皆様も、単に音楽を楽しむむと云った雰囲気ではなく、音楽の彼方にあるものに耳を傾けるという心の在処のようなものが直

に伝わり、お互いに、お互いを超えた一つのものを見ていることがはっきりと知らされた時でした。

## Stunde der Kirchenmusik

Samstag, 27. April 2002 17:30 Uhr  
Evangelische Stadtkirche St. Dionys Esslingen am Neckar

Heinrich Schütz (1585-1672)

KYRIE, GOTT VATER IN EWIGKEIT (SWV420)

DAS GLORIA IN EXCELSIS (SWV421)

PSALMGEBET

Genzo Takehisa (geb. 1957 )

GOTT LEBT NOCH

Ein Klagelied über den Tod seines Sohnes Daigo Takehisa am 17. Juni 1997

Heinrich Schütz

DER NICAENISCHE GLAUBE (SWV422)

SCHAFFE IN MIR, GOTT, EIN REINES HERZ (SWV291)

Geistliches Konzert für Sopran, Tenor und Basso continuo

O SÜSSER, O FREUNDLICHER HERR JESU CHRIST (SWV285)

Geistliches Konzert für Sopran und Basso continuo

SCHRIFTLESUNG

Arvo Pärt (geb. 1935 )

MAGNIFICAT für gemischten Chor

Johann Jacob Froberger (1616-1667)

CAPRICCIO NR. 2 (FbWV 508) für Orgelpositiv

Rudolf Mauersberger (1889-1971)

GEH AUS MEIN HERZ UND SUCHE FREUD

aus der „Geistlichen Sommermusik“ (1948)

Jacob v. Eyck (1589-1657)

ENGLISCHE NACHTIGALL für Blockflöte solo

Rudolf Mauersberger (1889-1971)

SCHÖNSTER HERR JESU/ DARUM SAGE ICH EUCH

ICH BIN DAS BROT DES LEBENS/ WANN WIRD DOCH EINST ERSCHEINEN

VATERUNSER - SEGEN

Heinrich Schütz

ICH DANKE DEM HERRN VON GANZEM HERZEN (SWV424)

DANK SAGEN WIR ALLE GOTT (SWV425)

Ausführende:

Agnes Giebel (Köln), Sopran/ Momoko Tanno (Minneapolis), Sopran  
Taro Tanno (Tokio), Tenor/ Blockflöte/ Masaru Ishii (Tokyo), Orgelpositiv  
Heinrich-Schütz-Chor Tokio Leitung: Yumiko Tanno (Tokio)

4回(そのうちの2回は同じプログラム)のコンサートのプログラムを主催者の作って下さった表記に従って書き出してみました。主催者に送ったプログラムの書式は同一のものであったにも拘わらず、書き方によって、その演奏会の主張や願いがはっきりと聴衆に知らされるのです。ハイルブロンシュッツ合唱団との交歓演奏会(4/26, 28)では演奏者の紹介や合唱団メンバーの名前(本稿での漢字表記は今回付け加えたものです)が記載され、人間同士の友好が第一に考えられています。一方、エスリンゲンの「教会音楽のひとつき」では、はっきりと、これは礼拝ですので無料です。どうぞ献金をお願いします、との但し書きがあり、なによりも曲のタイトルがすべて大文字で記されています。これは私にとって非常に興味深いことでした。日本での演奏会でも曲名の表示の仕方にはいつも考えさせられるので、今回のこの簡単な紙1枚の記録は私にとっては貴重なものとなりました。以下はエスリンゲン新聞に掲載された批評記事ですが、ここにも前掲のハイルブルンのそれとは焦点の当て方が異なっているのが分かり、興味深く思ったことでした。

#### エスリンゲン 音楽の使者—東京からの客人 聖ディオニス教会で歌う:

「すべての国の民があなたの前にひれ伏すでしょう。」聖書の最後の書(ヨハネの黙示録 訳者註)からのこの節が、エスリンゲンの市立教会でつい最近行なわれた〈教会音楽のひとつき〉で、首席司祭であるディーター・カウフマン師によって朗読された。この夜、この言葉が現実となった。東京からやってきたある合唱団がキリストの合唱音楽を提示したのだ。

日本のキリスト者は全く少数派で人口の1%に達するか達しないか、ということであるが、このハインリヒ・シュッツ合唱団・東京では35名の歌手たちのうちのおよそ3分の2がキリスト者である。多くの人が始めは合唱音楽に何ものかを感じ、その後洗礼へと導かれた。この8日間のヨーロッパ旅行、ここエスリンゲンでの他に、バート・ヴィムプフェン、ミュンヘン、そしてハイルブロンにも登場するが、この費用はすべて合唱団員が自ら支払っているとのこと。聖ディオニス教会での客演は、エスリンゲン市商工会議所の支配人であり旅行社社長のアクセル・グラウ氏の尽力で実現。

「ドイツ語で歌うということは日本語で歌う時とは全く異なったテクニックを必要とします。」と指揮者の淡野弓子は詳しく説明する。だがこの学びの苦勞のしがいがあり、ドイツ語で歌うと母国語である日本語で歌った時より、ずっと美しい響きが得られるのだそうだ。この名高い合唱団の、ドイツ語声楽作品への感動に満ちたアンガー・ジュマンは、ほとんど訛りのない演奏にも現れていた。

ハインリヒ・シュッツとルドルフ・マウエルスベルガーの作品の他に、アルヴォ・ペルト作曲、ラテン語の《マニフィカト—マリアの讃歌》が歌われた。この曲では、輝くようなソプラノのソリスト淡野桃子(ミネアポリス)が特に有効に作用していた。唯一の日本語作品は盲目の

オルガニスト武久源造が1997年、彼の4歳の息子の死に寄せて書いた追悼歌《神、なお生き給う》(詩編84の翻案テキストによる)であった。これらの声楽作品の間に、J. J. フローベルガーのカプリッチョ II が石井賢(東京)によるポジティブオルガンで、また彼の伴奏でソプラノ歌手アグネス・ギーベルとテノールの淡野太郎がシュッツの小教会コンチェルト2曲を演奏した。淡野太郎はヴィルトゥオーゾのリコーダー曲を演奏、彼の多彩な才能を明らかにした。  
Dietrich Peter Esslinger Zeitung (4/29/2002 ‘エスリンゲン新聞’紙)

4月27日(日)、いよいよ最後の演奏会です。ハイルブロンのカトリック教会で開催されました。再びハイルブロン・シュッツ合唱団とのジョイントでプログラムは26日と同じものです。最後とあって熱気満々、良いコンサートでした。この教会でも蘆野ゆり子カリグラフィエー展が催され、人々の関心を引きました。打ち上げはなんとワインの試飲会でした。まず赤と白のテーブルワインが並び、次に5種類のワインが次々に供され、なんと豪華なパーティ、途中で淡野太郎が引っ張り出され、ハイルブロン男性歌手たちと4重唱などの場面もありそれは楽しいひとときでした。

無事に東京に帰ってはきたものの、この旅行のあと、私は極度の疲労に襲われ、目の前に黒雲が立ちこめ、深い霧に包まれてしまったような精神状態に。実はこの旅行中にエアフルトの高校で銃の乱射事件があり、連日TVでは大きく取り上げていました。私たち外国人は異国の美しいものに心を惹かれ、好みに合うものだけをわがままに摘み取っては自分のものにしようとやっきになりますが、その美しいものの陰にはその何倍もの暗い歴史が潜んでいます。その地を訪れ自分の足で土を踏んでみると、足の裏からじわじわとその悲しみが伝わってくるのを感じることがあります。どうも私はこの旅行でドイツの悲哀を身体一杯に吸い上げてしまったようでした。

とは言っても次ぎ次ぎにやってくるコンサートの準備で嫌でも身体を動かす毎日が始まり、夏から秋にかけて二つの催しが本郷教会で開かれました。

8月25日(日) 午後5時 本郷教会礼拝堂 聖書朗読 廣田 登(本郷教会牧師)

~~~~ 声の織り成す魂と情緒 ~~~~ ア・カペラの宝函

淡野弓子 指揮 ハイブリッド・シュッツ合唱団

《夜明け前の歌》★暁の星が昇り M. プレトリウス

★夜明け前のひととき H. ディストラ

《朝の歌》★起きなさい、可愛い子供たち M. ヴルピウス

★行け、我が心よ R. マウエルスベルガー

《歌の中の歌》★ソロモンの雅歌 全6曲 L. レヒナー

《祝婚の歌》★なんじの若き日の妻を喜べ J. H. シャイン

《別れの歌》★君は海の彼方に ★別れの歌 K. マルクス

- ★インスブルックよ、さようなら C. オルフ  
 (夕べの歌) ★光の創り主、至高なる方 G.P. パレストリーナ ★月が昇り M. レーガー  
 ★今や森は静まりて J.S. バッハ  
 (真夜中の歌) ★眠っていても心は目覚め ★あなたは私の心をときめかす H. シュッツ  
 (新しき歌) ★歌え、主に向かって新しき歌を H. シュッツ

このコンサートで歌った 20 曲を選び出すのに数多のア・カペラ作品に目を通してうちに、この世界遺産のような名曲を 20 数名の人間で再現出来るということは、実に奇跡的なことではなかろうかとの思いが湧き上がり、私もやっと元気を取り戻しました。

続いて待ちに待った本郷教会（オルガン奉献礼拝）がオルガニスト菅 哲也氏をお迎えして捧げられました。

9月22日(日) 午後5時 本郷教会礼拝堂

オルガン奉献礼拝 日本キリスト教団本郷教会 牧師 廣田 登

パイプ・オルガン [手ふいご付き]

草刈オルガン工房 草薙徹夫 製作

Gedackt 8' 51本 (金属製閉管、C - H: 木製閉管)

Prinzipal 4' 51本 (金属製閉管)

Oktave 2' 51本 (金属製開管)

足鍵盤 (C - d<sub>1</sub>) Pull - down (手鍵盤に常時連結)

[2000年クリスマスに完成]

曲目

- G. ムファット 《トッカータ第1番》 オルガン  
 J.P. スヴェーリンク 「天にいます唯一の神に栄あれ」 オルガン  
 W. モーツアルト 「アレレヤ」 モテット 「踊れ、喜べ」 より 独唱/ 合奏/ オルガン  
 A. ペルト 《幸いの教え》 マタイ伝・山上の垂訓 より 合唱/ オルガン  
 J.S. バッハ 《前奏曲とフーガ ハ長調》 BWV531 オルガン  
 J.S. バッハ 《カンタータ第140番》 「目覚めよ、と呼ぶ声あり」 独唱/ 合唱/ 合奏/ オルガン  
 奏楽  
 オルガン 菅 哲也 ソプラノ 淡野桃子 バリトン 淡野太郎  
 ヴァイオリン 瀬戸瑠子 (コンサートマスター) オーボエ 川村正明  
 コントラバス 西澤誠治 オルガン/ スピネット 石井賢  
 合奏 室内オーケストラ オーボエ 大木務/ 宮本忠昌 ファゴット 淡野太郎  
 ヴァイオリン 棗 綾 ヴィオラ 佐藤真 チェロ 大軒由敬  
 合唱 ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京/ 会衆 (カンタータ・コラール)  
 指揮 淡野弓子

草薙徹夫氏の製作によるこのオルガンは8、4、2の三ストップ、一段鍵盤で足鍵盤が連結、手ふいご式（電動も可）の小さな規模のものですが、それぞれのパイプの音はキリリとして澄んでいます。特にプリンツィパルの4フィートはしっかりとした音色でスピードがあり、音楽をリードして行く力に溢れています。

菅氏によってムファットのトッカータ第一番が奏されると、招きの言葉として詩編98「新しい歌を主に向かって歌え」が本郷教会の廣田登牧師によって朗読されました。応える音楽は菅氏のオルガンによる「Allein Gott in der Höh' 天にいます唯一の神に栄あれ」です。続いて牧師より「私たちはこのオルガンを神の御用のために奉獻致します。（後略）」との宣言がなされるとモーツアルトの「アレルヤ」が続き、さらにマタイによる福音書5；1-12の「山上の説教」が朗読され、同じテキストによるペルトの《幸いの教え》が演奏されました。祈りが捧げられ、いよいよバッハの大曲《前奏曲とフーガ ハ長調》が鳴り渡り、このオルガンの持つ力と清冽で慎み深い響きが会衆の心に届いたと思います。

ここでテサロニケの信徒への手紙5；1-1、マタイによる福音書25；1-15の朗読があり、バッハの《カンタータ140》「目覚めよと呼ぶ声あり」の演奏が始まりました。オルガンはここで通奏低音という役割に回り、最後に会衆とともに歌われた終曲のコラール「グローリアと歌え」において全ストップが開かれ、そこにいた全ての人の声、オーケストラの音を包み込んだのでした。

製作者の草薙徹夫氏、義子夫人も列席され、草薙氏は「人の手によって風を送り込むふいご付きであることと、スウェーデンの田舎にある古いオルガンをイメージし、その中の重要な三つのパイプの寸法をここに用いていることが特徴です。今日はイメージした音が鳴っていたので、ひそかにほくそ笑みました。」と語っておられました。以来このオルガンは毎週の礼拝はもとよりSDGにおいても大活躍です。特に2003年より始まった《教会暦によるバッハ・カンタータ・シリーズ》で果たしているこの楽器の役割は非常に重要と申せましょう。

実はこのオルガン奉獻礼拝と10月のシューマン《薔薇の巡礼》にご出演いただく予定であったアグネス・ギーベル女史は、8月10日に81歳のお誕生日を迎えられた後、腰を痛められ来日不能という連絡が……ご高齢なので心配でしたが、そこへギーベル先生が「ドイツ連邦功労十字勲章を受賞なさったという嬉しいニュースが飛び込んできました。10月4日の授賞式では大統領が、「最も素晴らしい歌い手に」と言われ勲章を手渡されたとか。ギーベル先生は「もし腰が痛くならなければ私は今日本に滞在中で、ここに来ることは出来ませんでした。」と答えられ拍手大喝采だったとのこと。受賞の理由には1990年から2001年に至る日本での演奏と日本人歌手たちへの教育も併せて評価されたとのこと、私達も非常に嬉しく思いました。

こんなわけで、ギーベル先生のご出演は叶わなかったのですが、9月22日の代役は淡野桃子が、そして《薔薇の巡礼》の「薔薇」は徳永ふさ子が相務め、双方無事に終了。

10月3日(木)午後7時 ルーテル市ヶ谷センター

ムシカ・ポエティカ・秋の特別公演 シューマン作曲《薔薇の巡礼》

Melchior Franck (1573-1639) 《雅歌》よる2つのモテット

Du bist allerdinge schön 愛する者よ、あなたはことごとく美しく(5声)

Meine Schwester, liebe Braut 我が妹、愛する花嫁(6声)

ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮 淡野弓子

Robert Schumann (1810-1856) 《薔薇の巡礼》DER ROSE PILGERFAHRT Op. 112

～モーリッツ・ホルンの詩による合唱牧歌～

薔薇(ソプラノ): 徳永ふさ子 妖精の女王: 羽鳥典子 マルテ/ 水車屋の娘: 永島陽子

テノールソロ: ツェーガー・ファンダスツェーネ Zeger Vandersteene

墓堀人(バリトン): 淡野太郎 水車屋の男(バリトン): 石井賢

ソプラノ二重唱: 今村ゆかり/ 柴田圭子

合唱: アンサンブル・アクアリウス/ ハインリヒ・シュッツ合唱団

ピアノ: 林 苑子 指揮: 淡野弓子

人間の少女になりたいとの憧れを抱いた一輪の薔薇が、妖精の女王や妖精たちの制止を振り切って人間界に降り、一人の少女、ローザとなります。思いもかけない厳しい現実のなかで、少しずつ成長して行くローザはついに一人の青年に出会い結ばれます。母となった薔薇娘は青い目をした幼子を抱き「わたしの巡礼はこれで終わりです。わたしにとっての死は暗黒の死ではなく茜色の曙……」と呟くように言って春の光のなかにフッと消えて行きます。天使が薔薇を迎える合唱でこのオラトリオは終わります。シューマンは妖精であった薔薇が人間の少女になり、最後は天使となるという、心の高揚、浄化、変容を書きたかったとのこと。

プログラム・ノートは当協会会員で、当時は東京大学大学院博士課程に在院しシュッツ合唱団のソプラノでもあった瀬尾文子さんが執筆してくださいました。〈シューマンの追求したもの—薔薇から乙女、そして天使に—〉というタイトルで、実に興味深いこの曲の成立過程と、シューマンが同時期に構想し結局は未完に終わったオラトリオ《ルター》に触れて「宗教音楽に力を注ぐこと、それが今もって芸術家たちの至上の目標だ。」との言葉を紹介してくださいました。またピアノを弾いてくださった林苑子さんは、シューマンの《森の情景》の中の『予言の鳥』という曲のモチーフが《薔薇の巡礼》に二度出て来る、ということをお教えくださったのでその箇所を調べてみますと、薔薇が少女になる場面と、少女が天使になる場面でした。シューマンは「薔薇」の変身を『予言の鳥』によって知らせたのか、と改めてシューマン音楽の詩的なピアノの語らせ方に打たれたのでした。

11月8日(金)午後7時 東京カテドラル聖マリア大聖堂

〈レクイエムの集い〉～ 魂の慰めのために ～

ハインリヒ・シュッツ Heu mihi, Domine ああ、悲しきかな、主よ SWV56

ピエール・ド・ラ・リュエ Requiem Missa pro defunctis レクイエム 死者のためのミサ

グレゴリオ聖歌 先唱: ツェーガー・ファンダスツェーネ Zeger Vandersteene  
合唱: ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮: 淡野弓子  
J. S. バッハ 無伴奏パルティータ第二番より シャコンヌ 二短調 BWV1004  
ヴァイオリンソロ: 永田邦子 (アントワープ)  
～休憩～

ヘンリー・パーセル(ca. 1659-1695)

An Evening Hymn タベの讃歌/ The Queen's Epicedium 女王への追悼歌/

Lord, what is Man 主よ、人とは何

テノールソロ: ツェーガー・ファンダスツェーネ

ヴィオラ・ダ・ガンバ: 市瀬礼子(ロンドン) ヴァージナル: 菅 哲也

J. S. バッハ (1685-1750) Kantate Nr. 106 Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit

カンタータ第 106 番 追悼行事「神の時は最上の時」

ソプラノ: 今村ゆかり/ 柴田圭子 テノール: ツェーガー・ファンダスツェーネ

カウンターテナー: 依田 卓/ バリトン: 淡野太郎 バス: 石井賢

リコーダー: 山岡重治/ 向江昭雄 ヴィオラ・ダ・ガンバ: 市瀬礼子/ 故・中野哲也

ファゴット: 堂阪清高 ヴィオローネ: 西澤誠治 オルガン: 菅 哲也

合唱: ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮: 淡野弓子

ご覧のようにシュッツ→ラ・リユー→バッハ→パーセル→バッハというプログラムでしたが、名曲揃いでしたので、どのステージも集中してお聴き戴けたようです。シュッツからラ・リユーへの流れはうまく行くのだろうかとの懸念もあったかとは思いますが、シュッツの Heu mihi, Domine を含む《カンツィオーネス・サクレ》は彼がヴェネツィアで学び得たラテン語による対位法の集大成であると同時に、宗派を超える信仰の在り方を示す重要な証言とも言える音楽ですので、ラ・リユーのラテン語による《レクイエム》への移行はスムーズだったと記憶しています。

普段は離れて暮らしていた両親を相次いで亡くしたベルギー在住の永田邦子は、ヴァイオリンを手にたった1人で聖壇に登場、1挺のヴァイオリンから放たれる1音1音は大聖堂の空気を隅々まで振動させ、倍音は倍音を生んで複雑な音彩に変わって行きました。バッハの無伴奏パルティータの「シャコンヌ」とはこのような音楽であったか、と驚いたのを覚えています。

ツェーガー先生はいつもと変わらぬ温和な表情、親しみに満ちたテノールで典雅なパーセルの歌曲をお聴かせくださいました。最後はバッハの106番です。プログラムを見ると、私はこのカンタータについてかなり長文の解説を書いていた。最初にテキストについて触れ、次に楽器編成について述べています。ご存知のように、この曲には2本のリコーダーと2挺のガンバが用いられており、この二つの異なる音色は、人は死すべき定めにあるという神の旧い約束に、いや、イエスによって人は永遠の生命を得る、という新しい約束が鋭く切り込む、ということ表現しているのではと記していますが、たった今ハッとしたのは、天と地を結ぶようなリコーダーの音色と水平線のようなガンバの響きは十字架を示すものではないか、ということです。過去の記録を辿り乍ら、今、気の付いたことを述べるのもどうかとは思いますが、お

許してください。亡き中野哲也さん、その愛弟子の市瀬礼子さんのヴィオラ・ダ・ガンバに山岡重治さん、向江昭雄さんのリコーダー、通奏低音は堂阪清高さんのファゴットに菅哲也さんのオルガン、というおっとりした器楽アンサンブルの音色が記憶の底から鮮明に甦ってきます。

12月23日(月・祝) 午後5時 本郷教会礼拝堂〈本郷教会クリスマス・コンサート〉

H. ディストラー Singet frisch 歌え、爽やかに

H. シュッツ クリスマスのモテット

H. シュッツ Weihnachts Historie 《クリスマス物語》

ツィンク/ リコーダー: 細川大介/ 中村孝志(+トランペット) ドゥルツィアン: 淡野太郎  
バロック・トロンボーン: 飯塚睦彦/ 喜多原和人 ヴァイオリン: 若尾智夫/ 若尾紀子  
ヴィオラ: 二宮昌世/ 二宮かおる チェロ: 大軒由敬 コントラバス: 杉野達也  
ヴァーヂナル: 瀬尾文子 指揮/ スピネット: 淡野弓子 企画構成: 淡野太郎

シュッツの《クリスマス物語》を演奏しました。ここでも各楽器の持つ音色が天界の様子、地上の情景、そしてさまざまな人間の佇まいや性格をくっきりと表現しています。終曲の „Singen, singen“ を思い切り歌える幸せは正に天の贈り物、思い出の詰まった2002年も感謝とともに目出たく終わりました。次回は2003年の記録へ進みたいと思います。(続く)

2002年〈SDG〉の記録(日付のみ)

1/5、1/12、1/19、1/26、2/2、2/9、2/16、2/23、3/2、3/9、3/16、3/23、4/6、5/18、5/25、  
6/1、6/8、6/15、6/22、6/29、7/6、7/13、7/20、11/16、11/23、11/30、12/7、12/14、12/21  
8/25★本郷教会サマーコンサート2002

## 会計担当からのお知らせとお願い

いつも会計事務にご協力いただき、ありがとうございます。

今年の年会費の納入状況はあまり芳しくありません。年末を迎え、諸事ご多忙のことと存じますが、ぜひ早い機会にご送金をお願いできれば幸いです。皆さま全員の会費がまとまった段階で本部に送金いたします。

未納の方々には、改めて振込用紙を同封しています。どうぞご確認ください。

個人会費：年額4,500円

振込先：ゆうちょ銀行 振替口座 00170-1-9055

名義：国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

他の金融機関からお振り込みになる場合は、以下です。

銀行名 : ゆうちょ銀行  
預金種目 : 当座  
店名 : 〇一九店 (ゼロイチキュー店)  
口座番号 : 0009055  
名義 : 国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

引きつづき皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。ご不明の点がおありの場合は会計担当までご連絡ください。

例年のように、支部の余剰金から会員お一人5ユーロ程度を本部に寄付させていただき予定です。合わせてご了承のほど、よろしくお願い申し上げます。

会計担当 山下道子

## 会員の活動状況

お申し出いただいたもの、編集委員がネット等を通して見つけた情報等で、2019年前半の活動の内、シュッツ周辺、バロック音楽等に関わるものを中心にお知らせします。イヴェント、コンサート、講演、出版等の御紹介です。なお出版物に関して入手可能なものは、既刊の物、予定のもの等を含め、比較的最近のものを御紹介しております。イヴェントやコンサートに関しては、年2回のNewsletter 発行と日程が、お知らせに間に合わないものもあります。しかし幸い日本支部のホームページが開設されました。そちらへお申し出いただければ、時宜を違えずに、掲載させていただきます。(会員名あいうえお順)

### 1) 荒川恒子 (お問い合わせ [eterna@nifty.com](mailto:eterna@nifty.com))

- ・2019年4月26日(金) - 28日(日) 古楽フェスティバル〈山梨〉(含む第32回国際古楽)
- ・2019年4月29日(月・祝)、30日(火) 於: 聖グレゴリオの家  
ロベルタ・インヴェルニッツィ女史による、バロック声楽マスターコース開催  
<http://eterna.lolipop.jp/competition/> (上記フェスティバル、マスターコース関係)
- ・2019年7月18日(木) 於: 山梨県立図書館多目的ホール
- 2019年7月26日(木) 於: 東京・近江楽堂  
ムジカ エテルナ甲府 第94回定期演奏会(企画・構成・演奏)

### 2) 石井 賢 (お問い合わせ [ishiim@tkg.att.ne.jp](mailto:ishiim@tkg.att.ne.jp))

- ・2019年1月14日 於: 浜離宮朝日ホール  
ヘンデル: ソロモン (出演および楽器提供) (ヘンデル・フェスティバル・ジャパン主催)
- ・2019年3月3日 於: 桃源文化会館  
バッハ: ロ短調ミサ(出演および楽器提供)

- ・CD録音（出演および楽器提供）（ヘンデル・フェスティバル・ジャパン制作）  
ヘンデル：メサイア（1714年手稿版）（ALCD 9190-9191 2018年11月リリース）

### 3) 淡野弓子

- ・2019年1月5日（土）10:30-12:00 於：朝日カルチャーセンター横浜教室（横浜駅東口、ルミネ横浜 8F）  
新春のバッハ 《クリスマス・オラトリオのアリアを歌ってみよう》 講師  
3240円（会員） 3888円（一般）  
お申込：朝日カルチャーセンター横浜教室 045-453-1122 WEB → 朝カル横浜
- ・2019年2月9日（土）、23日（土）、3月9日（土）10:30-12:00  
於：朝日カルチャーセンター立川教室（JR立川駅 ルミネ 9F）  
バッハ《ミサ曲 ロ短調》全27曲をひもとく - 音で描かれたミサの式文と構成 講師  
9072円（会員） 11016円（一般）  
お申込：朝日カルチャーセンター立川教室 042-527-0411
- ・ハインリヒ・シュッツ合唱団〈受難楽の夕べ〉2019  
2019年4月12日（金）19:00 於：三鷹市芸術文化ホール「風のホール」  
《ヨハネ受難曲》  
指揮：淡野太郎  
ハインリヒ・シュッツ合唱団 東京 & メンデルスゾーン・コア  
ユビキタス・バッハ  
お問い合わせ：T 03-3998-8162 F 03-3998-5238 [www.musicapoetica.jp](http://www.musicapoetica.jp)  
チケット予約 T/F 042-394-0543 菊田音楽事務所

### 4) 橋本周子（お問い合わせ <http://st-gregorio.or.jp/>）

- ・聖グレゴリオの家では2019年4月より、臨床音楽セラピスト養成科を新設します。  
募集要項は12月2日に発布され、入学テストは2019年1月12日（土）に実施されます。  
これは「深層心理学的音楽療法」のメソッドを中心に、多様なニーズに対応できる音楽セラピストを養成する社会人のための3年6ヶ月のコースです。ハンブルク国立音楽演劇大学音楽療法科との提携に基づいて作成されたカリキュラムに沿って学びます。

お詫び：中世ルネサンス音楽史研究会のメンバーとして、正木光江様が携わられましたガイド・ダレッツォ著の全訳と解説の御著書の名称は『ミクロログス』ではなく、正確には『ミクロログス』です。また同研究会のメンバーには寺本まり子氏も所属しておられます。申し訳ございません。御訂正をお願いいたします。

## 本部からのお知らせ

1) 今年には会長選挙の年でした。選挙はそれまで委員であった方に、前もって続行する意志が  
おありか、または御辞退なされたいかお尋ねします。空席になる座がある場合、相応しい方を  
選び本人の意志を確かめて候補者とします。総会の中では候補者になられた方全てに対して、  
同意が得られるかを、選挙するというやり方です。今まで会長を務められたヴェルター・ヴェ  
ルベックさんはすでに15年もその座におられました。そこで御辞退を表明しておられまし  
た。その他の方の中にも辞退された方が多かったため、全体はきりりと締まった陣容で、若返  
った役員編成となりました。

会長: Arno Paduch (ツィンク奏者、Johann Rosenmüller Ensemble 主宰)

副会長: Dr. Jutta Schmoll-Barthel

会計: Prof. Dr. Jürgen Heinrich

書記: Prof. Dr. Walther Werbeck

事務局: Christoph Schluckwerder

その他7名の顧問の名は、本部ホームページにすでに掲載されております。

会長のパドゥフ氏はフランクフルト大学で音楽学を、バーゼルのスコラ・カントルム・バジリ  
エンシスでツィンクを学ばれました。シュッツ協会では最初の演奏家会長です。

今回の大会は裏方を務める方が少なかったもので、ヴェルベック会長自らが選挙用紙を配ってく  
ださったり、細やかに会員の世話をしてくださいました。15年も見事に会長職を務められた  
氏の手腕、難しい問題を見事に纏められるおおらかな御性格、絶えず御一緒に大会に参加さ  
れ、蔭になり日向になり協力されたヴェルベック夫人に、会員全員は感謝の気持ちで一杯であ  
ったはずです。しかしそれを形で示す花束等を準備する暇はありませんでした。その時大先輩  
にあたるブライク教授が立ち上がり、「君」と話しかけられ、先生の長くに渡る協会への献  
身、素晴らしい仕事振りを褒め称えられました。何にも増して嬉しいお言葉であったことデ  
しょう。お顔を真っ赤にして、感極まったお気持ちを押さえておられました。これこそ最高のプ  
レゼントであったはずです。

2) 総会の席では声は弱られたが、お元気な様子とお報告のありました旧事務局長ジークリン  
デ・フレーリヒ(1940-2018)さんは、1965年から2015年までの50年におよぶ協会への御貢献  
を、3年前のドレスデン大会を最後に辞されました。その後すぐに御病気の報をいただきました。  
まさに3年に及ぶ闘病の末、この12月5日朝に御逝去なされ、12月13日にカッセルで  
埋葬式が行われました。本部ホームページの冒頭に彼女のほほ笑むお写真が掲載され、役  
員一同より労いと感謝の言葉が記されています。うら若きシュッツの音楽が大好きな乙女とし  
て協会の組織を動かし、人々の交流の中心として尽くしてくださいました。日本支部のため  
には、昨年正木光江前支部長を名誉会員に推挙するために、最後の力を振り絞ってくださいまし  
た。いつもきちんとした文体でメールをくださるのに、その時交換したメールの文章がかなり  
乱れていることが気懸りでした。しかし正木様の名誉会員授与式に立ち会いたいと、旦那様に

支えられマールブルクの総会に出席してくださいました。会員は総会に2人の名誉会員が出席していることを、喜び合いました。参加した日本支部全会員を御自分のタブレットで写真に収めてくださり、日本支部の会員には、ことさら御心遣いをいただいたことを、お伝えいたします。

3) 来年のシュッツ・フェストは2019年10月10日—13日 於：カールスルーヘ

主題：Klang als Repräsentation - von Schütz bis Rihm

1613年8月24日にヘッセン・カッセル方伯オットーがバーデン・ドゥルラハのゲオルク・フリードリヒ辺境伯の娘カタリーナ・ウルズラと結婚式を挙げました。その式次第が印刷物として残されています。そこからこの地の12名の音楽家の存在が知られます。また二重合唱による祝祭モテットも作曲されました。17世紀初頭から、デジタル化の進んだ現在の工業都市カールスルーヘに至る音楽、新会長パドゥフ氏、ブレーメンのコレディス氏、ドレスデン・カンマーコアを率いるラーデマン氏等によるコンサート、素晴らしいオルガン見物、フランスとスイス国境近くの小都市の歴史に纏わるシュッツ等、興味深いフェストとなることでしょう。お出かけの難しい時期ですが、お覚えいただければ幸いです。

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

設立 1965年3月28日

Homepage <http://www.schuetz-jp.org/>

支部長 荒川恒子 〒221-0002 横浜市神奈川区大口通 137-5

TEL/FAX 045-421-0502 E-Mail [eterna@nifty.com](mailto:eterna@nifty.com)

会計 山下道子 TEL/FAX 03-5497-0840 E-Mail [im-ymst@jcom.ne.jp](mailto:im-ymst@jcom.ne.jp)

(事務一般および様々な御質問、御意見、情報は荒川へ、会計に関することは山下へ)

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部Newsletter 編集 荒川恒子  
木村佐千子